泉
いずみ

ー目次ー

表紙「勿忘（わすれな）の鐘」
「コラム百折不撓」住職
連載「ハヤブサ物語16」
震災十年特集・追悼表白等
北目さん記事
ハザード会記事・地域防災への試み
連載「共に生きる④」老僧
コロナ禍に思う
蒲団屋と周利槃特（しゅりはんどく）
さとりの知恵を読む25「アジャセ王物語①」
掲示板・お知らせなど

もう十年まだ十年と時は過ぎ
それぞれ刻む心の秒針　　博子

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

コラム「百折不撓」

野呂大悟

少し温かい日差しを感じることが出来る様になってきました。土筆が芽を出し、娘と近所をフラフラしながら、土筆を取っては美味しく食べています。娘は土筆が大好きで、卵とじにすると、パクパクとよく食べています。

ちょうど一年前、三月に滋賀県に住んでいる母方の祖父が亡くなりました。祖父は、とても健康に気を遣う人で、毎日血圧の測定結果をパソコンに入力してグラフ化して、データを取るなど、健康には人一倍気をつけて生活していました。何か気になることがあると、すぐに医者へ行くような人でありました。そのため、祖父に会いに行くたびに、タバコを吸っている私に対して、何度も何度も「タバコを止めろ！」と耳にタコが出来るほど同じことを言っては、言うことを聞かない私に落胆していたことでしょう。

子どものころから、夏休み・冬休み・春休みに、母方の祖父・祖母の家へ遊びに行くのが楽しみでした。新幹線に乗って、米原でJR（当時は国鉄）に乗り換えて、近くの草津駅でバスに乗り換える行程も、田舎すぎて自動車か自転車でしか移動しない生活をしていた私にとっては、とても刺激的で楽しかったことが今でも思い出されます。

何せ、母方の祖父・祖母との思い出は、楽しいことばかりであったので、大人になっても、その頃の気持ちが溢れてきます。祖父・祖母の家へ行くと、子どもの頃に遊んだ記憶や匂い、場所も鮮明に思い出されます。近くの公園で日が暮れるまで遊んでいた記憶も、近くの用水でザリガニを取った思い出も、畑へ行きトマトを採った思い出も、おばあちゃんを説得して、買い物に行くだけで京都まで行った思い出も。

ただ一つ、勉強も良くやらされた記憶は唯一の嫌な思い出ですが。

昨年の三月に祖父が亡くなり、葬儀のため滋賀県まで行きました。ちょうどコロナウィルスの感染が拡大していく最中でした。コロナの影響で葬儀も身内のみ。その後、祖父は検体のため、火葬はせずにそのまま医大へ行きました。それから一年。コロナの緊急事態宣言の影響で県外への移動自粛。今は祖母のみ一人で暮らしているため、万が一を恐れて、なかなか祖父の家へ行けませんでした。しかし、一年を過ぎて、どうしても一周忌のお勤めだけでもと思い、葬儀以来、先日お勤めをしに行きました。

亡くなった祖父・一人で暮らしている祖母に会うのは一年ぶりでした。今まで、一年まったく会わなかったことはなかったかと思います。

ちょうど祖父・祖母の家へ到着した数時間前に、祖父の陶芸（趣味であった）仲間から、一周忌になるということで綺麗な花が届きました。そのお花も仏壇へ荘厳させていただき、お勤めしました。

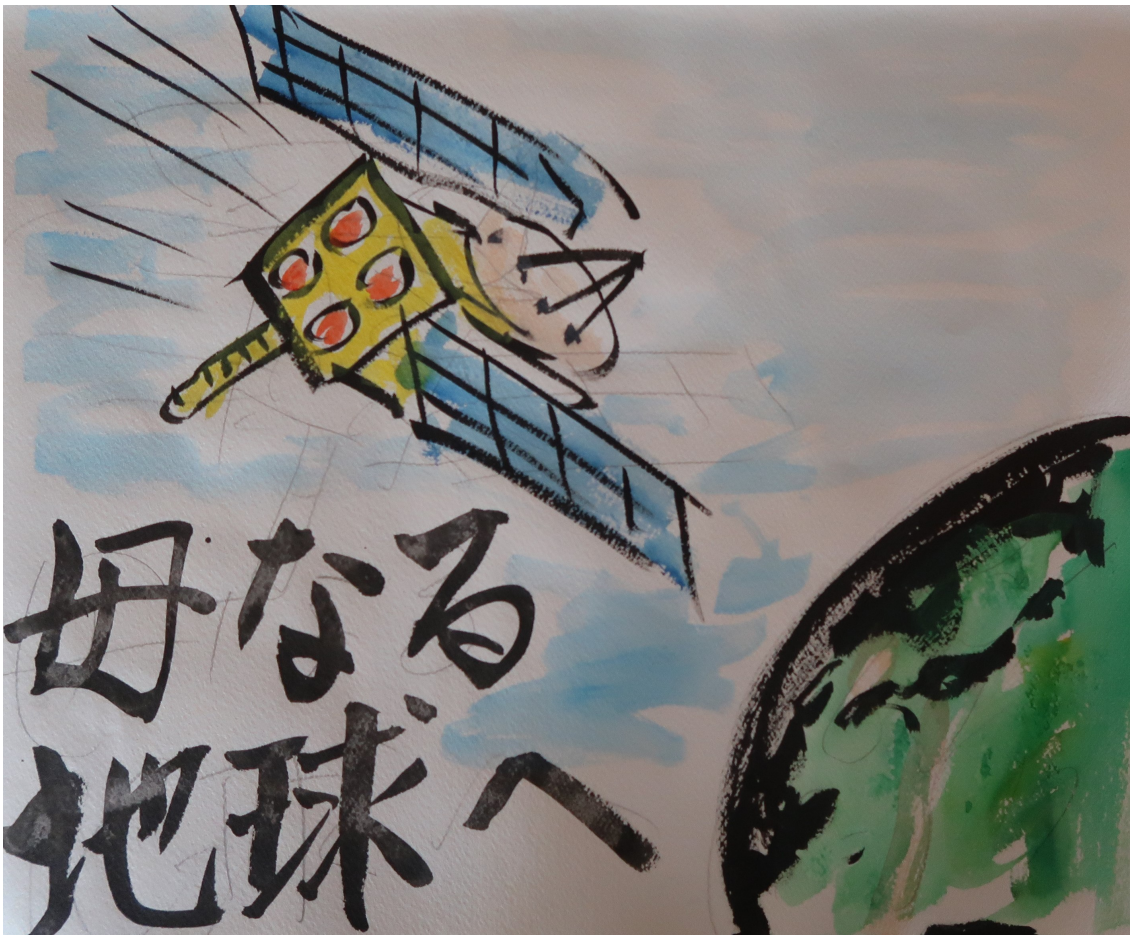
以前も書きましたが、命は必ずいつかは尽きます。それは避けられないことですが、亡き人を偲ぶとは、亡くなった命に対して、感謝と亡き人の教えや生き様を忘れずに、私の心の中に生き続けますということを改めて心に想うことが、仏事であると思います。

時間が経てば忘れてしまう。その頃の気持ちや思い出が薄れていくことはもちろんあることです。しかし、仏事（仏様の教え）を通して、改めて育ててもらった感謝、命に対しての感謝を想い、「忘れないよ」と亡き人と語り合う場であることだと思います。

東日本大震災のこと、祖父のことを、「忘れないよ」と想いながら、毎年娘と土筆を食べようと思います。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

連載「ハヤブサ物語」16　野呂美道



◆奇跡的に僕は「母なる地球へ向かうことができた。この先、何があろうとも僕は必ず地球へ戻って見せるという強い意志を持った。僕の帰りを待つ地球のスタッフたちが、固唾を呑んで待っていてくれるだろう。◆僕は何年ぶりかで見る青い水をたたえた美しい星を思い浮かべた。そこには僕を育ててくれた無数の生き物や岩石や大気がある。何億年かの時の流れを経て僕は生まれた。そのどれ一つ欠けても僕は存在しなかった。遠い祖先への感謝の気持ちを新たに僕は飛び続けた。◆もうすぐ、地球の引力に引かれていよいよ僕は使命を全うしようとしたとき、地球のスタッフは僕に最後のミッション（仕事）を命令した。続く

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

表白

震災一〇年目を迎えた心境を述べます。もう一〇年であり、まだ一〇年であります。

◆二〇一一年、最初に私たちが支援に出かけてから、実に多くの方々と出会いました。どの人たちも、復興を目指して、日々の困難を乗り切る姿に私は多くのことを教えられました。◆女川町竹浦の高台移転を成し遂げた方達、そのうちの一人、北目さんは昨秋、お亡くなりになりました。自身が設計した新築のマイホームで奥様と水入らずの老後を送られたとの事、見事な御一生でした。◆仙台の海楽寺の大友さん。当時小学生の次男さんは今年もう大学生、私たちが訪れた二〇一九年に、勇気を奮い立たせて、自らの体験を話してくれました。◆安泉寺にホームステイに来てくれた二本松の水田さんの子たちはそれぞれ逞しく育って、将来が楽しみです。◆一〇年が経って私たちも年を取りました。震災の記憶の風化も叫ばれています。しかし、私たちはそれを食い止め、次世代に伝えていく義務を負わされていると実感しています。◆幸い、私たちの思いを受け継ごうと、地元で活躍する中高生の元気な若者が今育ちつつあります。世代を超えて、震災から学びましょう。未来の日本を救うために。

二〇二一年三月一一日　安泉寺　野呂美道敬白

◆3月11日、風の強い午後でした。数名の有志と共に、震災10周年の追悼法要を行いました。その後、鐘楼に登って、一人ずつ心を込めて追悼の鐘を撞きました。

◆その音は遠く東北の地にも、犠牲者の皆さんの耳にもきっと届いたと思います。私たちはこの機に、防災に対する新たな気持ちを持ちました。

◆忘れない、ということは、教訓を今に生かすことだと私は思います。それは頭で理解するだけのことではありません。体で実践してこそ、教訓が具体的な行動につながるのだと思います。

◆防災を決して難しく考えないで、日常生活の中で、防災に役立つ何かを実践しましょう。

◆例えばお料理です。キャンプ感覚で、紙と木切れ、そして虫眼鏡で太陽から火を貰い、煉瓦で炉を組み、鍋に水を張って、ポリ袋に野菜と肉と調味用を入れ、煮てみましょう。米も同じように煮ましょう。

◆段ボールでベッドを作り、遊び感覚で寝てみましょう。

◆こんなことを思いました。（次頁新聞記事）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

2021年3月4日(木) 夕刊 中日新聞に、先月号でお知らせした、女川町竹浦の北目富造さんの記事が、全国版に載りました。記者さんは現地とオンラインで取材し、私の話も交えて、熱心に推敲を重ね、見事な記事に仕上げてくれました。震災10周年、こういったささやかなエピソードは一杯あると思います。私はこの話を皆さんに紹介できて、心より嬉しく思いました。

中日新聞 (夕刊) (第3種郵便物認可)

仲間との街 再生見届け

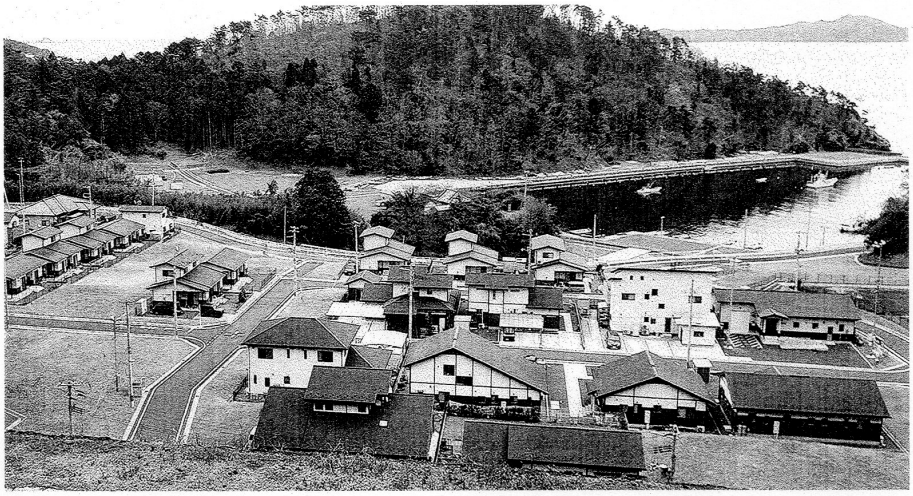
高台移転尽力の男性 死去

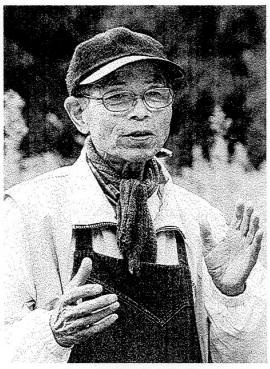
東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた宮城県女川町竹浦地区の復興に力を尽くした男性が昨秋、この世を去った。北目富造さん=享年八十三。建設会社で長年働いた経験を生かし、同地区の集団移転に取り組んだ。震災から十年の区切りを迎えた今年、地元住民からは「感謝してもしきれない」、東海地方で親交のある人からは「新型コロナウイルス禍がなければ会えたのに」と惜しむ声が上がっている。

(深世古峻一)

東日本大震災 10年

女川・竹浦地区





上 山を切り開き高台に集団移転した竹浦地区。奥右が竹浦漁港=宮城県女川町で(鈴木洋子さん提供)

下 北目富造さん=2013年10月、同町で(野呂美道さん提供)

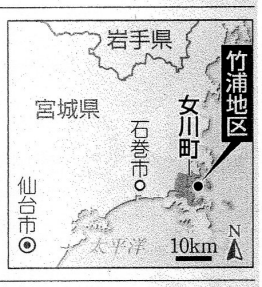
自然と調和 白壁をデザイン

北目さんとともに行政などとの交渉に当たった同町の漁師、鈴木誠喜さん(七三)と、支援活動で北目さんと親交を深めた愛知県愛西市の安泉寺の前住職、野呂美道さん(七二)が本紙の取材に思い出を語った。

釣りが趣味の北目さんは二〇〇〇年、仙台市から妻と二人で漁業が盛んな女川町竹浦地区に移り住んだ。行事に積極的に参加し、釣った魚を近所にお裾分けするなどして地域に溶け込んだ。そんな中、震災が発生。北目さん夫妻は高台に避難して無事だったが、全六十六世帯の大半が津波に流された。

当初はがれきの山を見て絶望感を覚えた。だが、震災の年の初夏、秋田県仙北市のホテルで過ごした避難生活が転機になった。窓から見えるスキー場に増える新緑。再生への希望を感じ「復興へのファイトが湧いた」。親族から仙台へ戻るよう勧められても、「仲間と一緒にいたい」と竹浦地区での生活を再開した。

同地区では、集落近くの高台への集団移転計画が始まった。高校卒業後、建設会社で三十年余り、設計や現場監督業務に携わった北目さん。「経験を生かしたい」と各自の要望を聞き取った上、基本案をまとめ、設計事務所に提案した。こだわったのは正面の海、背後の林と調和がとれるように、各戸の外壁を白にそろえること。統一感は復興に向けた団結を示す意味合いもあった。

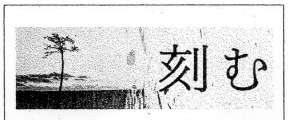


二〇一七年秋、山を切り開いた高台に集団移転先の住宅が完成し、続々と入居が始まった。「竹浦の人たちの生活を再建することが恩返し」と語っていた北目さんの願いがかなった光景だった。「本当にうれしそうで、今まで見た中で最高の笑顔だった」と鈴木さん。

現在、三十一世帯が移転先で暮らす。半数以上の住宅は白壁だ。漁を終え、港に帰ってきた船からは、高台の白い家々が輝くようによく見える。復興への道筋を確かに残し、北目さんは昨秋、病気で他界した。

鈴木さんは「北目さん抜きで進められた集団移転ではない。個人的にはまた一緒に釣りに行きたかった」と、声を詰まらせた。

野呂さんは「自分たちを受け入れてくれた地域住民の温かさに触れたから、土地を離れなかったのだと思う。集団移転のリーダー的な存在で、竹浦にとっては恩人だった」と語った。



刻む

中日新聞Webで震災と福島第一原発事故を特集しています。

東北訪問 地元防災に生かす

愛西の安泉寺と子どもたち

愛西市三和町の安泉寺は近隣の子どもたちを年に一度、東日本大震災の被災地へ連れて行く活動を続けてきた。震災から十年、現地を訪れた子どもたちは、地元のハザードマップ作成に取り組む。「地域防災を考えるきっかけに」との期待に応える成長ぶりを見せている。

（深世古峻一）

ハザードマップ作成

「ここは色を変えた方が分かりやすいんじゃないかな」。七日、安泉寺に集まった市内に住む五人の中学生たち。寺がある三和町は木曽川沿いで、津波による浸水リスクがあるため、地元住民に向けたハザードマップ作りを進めていた。

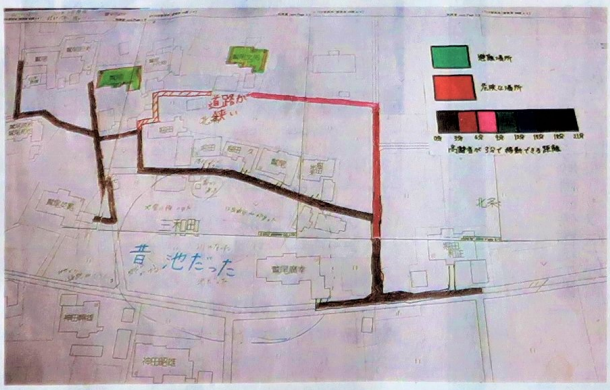
町内のかさ上げされている住宅などを、住民の許可を得た上で独自の「緊急避難所」に設定。高齢者が各住宅から、三分で歩ける距離をマーカーで色分けし、避難ルートに明示することで、緊急避難所までの所要時間を分かりやすくした。

「道路が狭い」「昔、池があった」など、避難の際に注意が必要なポイントも記した。測量や現地視察も子どもたち中心で行った。

この日集まった五人中四人は寺の活動を通じ、被災地を訪れた。立田中二年の中野静梨奈さん(一四)は二〇一九年夏、津波で多くの児童が犠牲、行方不明になった宮城県石巻市の大川小学校を訪問。震災から八年がたっても、学校付近で行方不明の子どもを捜す母親の姿を見て、ショックを受けた。「災害は軽いものじゃないと感じた。周りの大人や友達に、防災への関心を持ってもらえるように行動したい」と語る。

寺は震災当初の支援活動を通じ、被災者と交流が生まれた。前住職の野呂美道さん(七三)が中心となり、一二年から年に一度、檀家らとともに石巻市、女川町など宮城県の被災地を訪問。一六年からは地元の子どもたちも連れて行くように。昨年は新型コロナウイルスの感染拡大で断念したが、これまでに中学生を中心に約三十人の子どもが、現地で被災者の体験を聞くなどした。

三和町のハザードマップは三月末までに完成する予定で、集落の全約五十世帯にマップを配る。野呂さんは「自治体任せではなく、自分たちで防災を考えることが大事。子どもたちが周囲に刺激を与え、家庭から地域へと防災意識を広めていってほしい」と期待している。



上大人からのアドバイスを受けながら、ハザードマップ作りに取り組む中学生ら
下作成途中のハザードマップ＝いずれも愛西市三和町の安泉寺で

モーニング あれから

「東北が大変なことになってる。とにかく逃げて」。切迫した上司の声が今も耳に残る。

二〇一一年三月十一日。私は初任地の千葉県で、経験したことのない激しい揺れを感じた。沿岸部の街で事件取材をしており、とっさに海の方へ車を走らせた。

港に着くと、海水が高潮のようにゆったりと陸地へ押し寄せていた。太ももまで水につかった高齢女性が、男性に手を引かれて陸に上がってくる。反射的にカメラのシャッターを切っていると、上司から冒頭の電話がかかってきた。

内陸へ避難し、車中泊。翌日、車で一時間ほど移動し、津波で十六人の死者、行方不明者が出た千葉県旭市の現場を取材した。沿岸の家々は壊滅状態で、軽トラックが高さ三㍍の塀の上に打ち上げられていた。「もし、昨日の現場が東北や旭市だったら」。死んだら記事は書けない。若さゆえの無鉄砲さを反省した。

あれから十年。記憶の風化を防ぐ記事は、書き続けていこうと決めている。

（深世古峻一）

◆上の新聞記事は、私たちハザード会の活動をとらえたものだ。地道な活動がこのようにして皆さんに知られるのは嬉しい。◆でも私たちが一番望んでいるのは、「すごいことやってる！」と思ってもらう事ではない。「私たちもできることを是非やってみよう。」とか、「家庭で防災のことを話し合ってみよう。」とか**読者の皆さんが具体的に行動してもらうこと**を願って呼びかけているのだ。◆それが一番大切な「自助」と言われるものだ。日常生活の場で、今災害が起きた時、自分はどのように行動するのか、家族と事前に打ち合わせておく。まず、そこから始めて下さい。◆「津波てんでんこ」は「必ず自分の家族は逃げていると信じて、決して戻るな！」という教訓だ。私たちはいつかどこかで必ず会える！

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

新連載「共に生きる④」

野呂美道

◆ある晩、寝ている彼は首に冷たいものを感じた。起きると卒園生が彼の首にナイフを突きつけている。ポケットには酒瓶が詰まっていた。酔っぱらっていたのでよろけた拍子に倒れた卒園生は涙ながらに彼にこぼした。「あんたは本当の孤児の寂しさを知っているか。仕事もなく生きていけない。どうして、子供のうちに死なせてくれなかったのか！」当時は就職難で、タイピスト1名募集の広告に数百名が殺到するような時代だった。「孤児は二度棄てられる。生みの親に棄てられ、社会に棄てられる。」これを聞いて彼は大切な事に気づいた。彼はこの時、日本の新聞で母が寄稿している記事に目が留まる。「共生園を出て行く息子や娘たちに職を身につけさせてやりたい。」彼は母の夢を実現したいというファイトがみなぎった。様々な努力の末、共生園がソウルの総合職業訓練施設の委託運営を任されることになったのだ。これは卒園者に新たな道を開くことになった。男子は印刷・自動車・木工・タイル工、女子は洋裁・美容などの職業に道を開いた。失意のうちに共生園に戻ってくる卒園生は激減した。◆卒園生の相談も変わってきた。以前は生活苦の相談が多かったが、最近では「店を一つ買いたいが」という相談をする者まで現れた。「園長は自分の老後を考えないの？」という質問もあった。自分のことで精いっぱいの人間が、いつのまにか他人が見えるようにまでなっていたのだ。◆彼は国際連合に「世界孤児の日」を作ってほしいと運動をしている。そこには孤児を救おうというだけでなく、孤児を生み出さない平和な世界を作りたいという願いが込められている。日本と韓国が不幸な時代を乗り越えて、世界の孤児の問題を考えるために協力してほしいというものだ。◆もう一度言おう。共生園が世に訴えている事柄。36年前、在日コリアンの孤独死の記事がそのルーツだ。母も最期は日本人として死んだ。在日コリアンも最期は韓国人ではないのか。人間は子ども時代のことが無意識に心に入っている。それが、「故郷の家」設立の原点だ。そこでは月一度、朝鮮舞踊の鑑賞会が行われる。アリランを歌った時、車いすの老婆が思わず立ち上がって踊ろうとした。朝鮮人は朝鮮人らしく生きたい。朝鮮人らしく生活したい。（最終章に続く）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

◎高齢者の入院

◆高齢夫婦のお宅で御主人が入院、奥さんは夫と面会もできず、連絡もままならない。病院では、何かあったら連絡するという。（何かあったらとはどういうことか？）急変して駆けつけた時は臨終かもしれない。それまでの**かけがえのない夫婦の時間**はどこへ行ったのだ。◆病院に聞いたら、電話して容体を確認してくれとの事。お婆ちゃんは「病院に任せてあるから」と、あきらめ顔。◆別の話。野良猫を預かり、しつけてペットとして送り出すボランティアの話。障害のある猫を自分の家猫として、最期まで看取った家族。息を引き取るまでの何日間、それはそれは濃密なお別れの時間だった。◆どちらが充実した時間なのか、私には解らなくなってしまった。猫とお爺ちゃんとを比べてはいけないかも知れないが、家族にとってこの猫の方がはるかに幸せに思えてならない。

◎コロナ患者の葬儀

新聞記事によると、コロナで亡くなった方の遺体からは絶対にウイルスは出ないそうだ。しかし、現実はどうか。入院・死亡・納棺・火葬・納骨まで、一切家族は立ち会わせてもらえない。対面するのはお骨となって帰ってきた故人の証のみ。◆余りにむごい。コロナに過剰反応して、人間本来の介護・看取り・葬儀のプロセスがカットされてしまった。遺族の悔いは永遠に残る。コロナに対する正しい理解が欲しい。コロナのせいにするな！

◎「お寺で葬儀」の見直し

ある葬儀社が安泉寺を訪ねてきた。葬儀は寺院で行なうのがベストだと葬儀社の若き後継者は熱く語る。住職も私も大賛成だ。だが一つ条件を出した。◆新規に安泉寺で葬儀を行っていただく方は以後安泉寺と檀家関係を結んで頂くこと。お寺ならどこでもいい、その時限りであとはさようなら、そういうお方は固くお断り。◆これは高いハードルかそうでないか？　ご縁というのはそう簡単に結べるものではないし安易に結んではいけない。ネットの買い物とはわけが違う。◆コロナでいろいろな事の価値観が見直されている。あまりに粗末にしていたことが見直される日が来るだろう。◆命は決して**だだくさ**（方言で「粗末」の意）に扱ってはいけない。コロナ禍の今、考えるところを述べた。（付録を参照のこと）

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

蒲団屋と周利槃徳（しゅりはんどく）

野呂美道

◎新貝（しんがい）蒲団店の親子の話

◆新貝蒲団店の先代は工場のいたるところにチョークで格言を書いた。息子に面と向かって言うのが恥ずかしかったらしい。◆何十年も続けてきた純綿蒲団店。一組10万円以上もする布団に全国から注文が殺到し、半年待ちの状態。何故こんなに人気なのか？　それはお客のオーダーに応じる徹底した蒲団作りの姿勢である。◆彼は日本の伝統の技を受けつぐ職人として国から認定を受けている。ある日、86才の老人が訪れた。結婚当初、先代にダブルの新婚蒲団を作ってもらった。以来60年、余命いくばくもない最期の時はあんたの布団で死にたい。そういって掛け布団を注文した。◆先代の書き残した格言の中で私がオッと思った一言。「**誰にでもできることを、誰にもできないくらいやる**」。一流の布団屋になるには何十年もかかる。今なおよりよい蒲団への改良点は続く。彼の布団で寝るとぐっすり眠れると評判だ。一人一人に寄り添った絶妙の蒲団作り。10万円でも安い！

◎お釈迦様の弟子　周利槃特

◆知的障害があった周利槃特は純粋な心をもった青年だった。どうしてもお釈迦様の弟子になって、さとりを開きたいと思っていた。ほかの聡明な弟子たちがどんどん勉強して知識を得ていくのに、彼は一つの言葉も満足に覚えられない状況だった。◆ある時、お釈迦様は彼に一本の箒を与えてこうおっしゃった。「『塵を払い、垢を除かん』と唱えて、掃除をしなさい。」たったこれだけのことをするのに周利槃特は何年もかかった。言葉が覚えられないのである。「塵」を覚えても、「払う」を覚えたら、前の言葉を忘れるのである。彼は血のにじむ努力を重ねて、数年後やっと言葉を覚えた。しかし、彼はただ言葉を覚えただけではなかった。「私はさとりを得た」と仲間に告げた。「そんな馬鹿な！」弟子たちはお釈迦様の前に彼を坐らせ、尋問した。「心の塵を払い、心の垢を除くことがさとりです。」彼の言葉にお釈迦様は膝を打ってお墨付きを出した。◆この有名なエピソードと、「誰にでもできることを誰にもできないくらいやる」という布団屋の親父の格言とが私にはピッタリと重なった。不器用であれ、愚直であれ！　ただひたすら道を求める姿は、入口こそ違え、さとりに通じるものだと思う。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

釈尊が生きていたころ、マガダ国の王舎城にアジャセ（阿闍世）という大王がいた。この国王は凶暴で殺生を好み、偽りの言葉と悪口、二枚舌を使い、心は貪りと愚かさでいっぱいだった。彼はこの世の欲望への執着と親子の確執から非道にも父ビンビサーラ王を殺してしまったのだ。

しかし、父を殺して王となったアジャセは、深い後悔の念から熱病にかかった。そして全身にできものができ、ひどい悪臭を放ったため、誰もそばに近寄ろうとしなかった。

王は「私はこの身に報いを受けた。地獄へ堕ちて苦しむのもそう遠くはないだろう。」とつぶやいた。病におびえ苦しむアジャセを、母イダイケはさまざまな薬を塗って看病したが、効き目はなく、よくならなかった。

王は「このできものは心から出たもので、身から出たものではない。どんな人も治すことは出来ない。」と嘆いた。王は医師のギバに、「ギバよ、わたしの病は重い。正しく国を治める父を殺した。これでは、どのような名医や妙薬であっても、どんな看病をしても治すことはできないだろう。もう地獄に堕ちる以外ない。」と言った。

するとギバは、「王は罪を犯されたが、今はおおいに深く悔いておられる。自らの行いを懺悔し、罪を恥じる慚愧の心をもたれた。その心こそが救いにつながります。」と言って、すぐれた心の医師である釈尊を尋ねるように勧めた。

だが、わが身を恥じた王は釈尊のもとへ行くことをためらった。

そのとき、天から「おまえが救われるためには釈尊のもとに行くがよい。」という声が聞こえてきた。それは、アジャセを案じる亡き父ビンビサーラの声であった。その声を聞いたアジャセは恐怖におびえ、後悔のあまり気絶してしまい、病はさらに重くなった。

そのころ、遠くで身と心の病に苦しむアジャセ王の姿を見ていた釈尊は、「アジャセのために涅槃に入らない。アジャセのためとは、煩悩にとらわれ迷えるすべての人びとを救うためである、」と言うと、人びとに善の心を起こさせる月の光のように清らかな光明を放ち、王の身までを照らした。

すると王の全身のできものはたちどころに癒えた。身の病が癒えた王は、不安を抱きながらも、今度は心の病を治すためにギバとともに釈尊を訪ねた。

王を迎えた釈尊は、王の心のすべてを受けいれるかのように、「アジャセ大王よ。」と

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

さとりの知恵を読む24「アジャセ王物語①」

仏教伝道協会より転載

呼びかけた。罪の報いにおびえるアジャセははじめ、その声が自分に向けられた声であることを疑った。しかし、次第にその声が自分に対する慈悲に満ちた声であることに気づくと、心は喜びの気持ちでいっぱいになった。

釈尊は、「ビンビサーラ王は、昔わたしに施しを行い、その功徳で王位に就くことができた。もしわたしが施しを受けなかったら、王位に就けなかっただろうし、そうなれば、あなたが父を殺すこともなかったであろう。だから、あなたが父を殺したことが罪になるのなら、その縁をつくったわたしも同罪である。」と言い、アジャセの罪は自分の罪であると告げた。

この釈尊の人の心を思いやる慈悲の心に接し、感動したアジャセは、あらゆる人々の悪い心を除くためなら、私は地獄に堕ちても、どんな苦悩を受けることになっても後悔しない、というさとりの心を起こした。

「大涅槃経より」

解説文は次号に続く

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001

四月の行事予定

ハザード会　四日（日）十時

文芸クラブ　十五日（木）十時

おみがき　二十四日（土）八時半

春季永代経　二十九日（木）十時
※午前中のみ　お弁当を配布して終了
講師　宇治谷裕司 師
同日に花まつりも実施

今月の掲示板

私たちのことを忘れないで下さい

女川　鈴木京子さん

震災数年後、仮設住まいの京子さんから、「おかげさまで日常生活は出来ていますが、一つだけ野呂さんにお願いがあります。」と言って右の言葉を頂きました。（老僧記）

お知らせ

◆付録として、葬儀会場としての安泉寺のパンフレットをつけます。

編集後記（老僧）

◆同時に起きる地震水害疫病飢饉、人類はその都度これからの危機を乗り切ってきました。当時の西洋では「メメントモリ」（死を想え）という言葉が囁かれました。浄土真宗ではそれを「後生（ごしょう）の一大事」と言います。

◆Kさんからの絵手紙です。

発行責任者：安泉寺　住職　野呂大悟　　住所：〒496-0945愛西市三和町中ノ割173-1 電話：0567-28-0001